
自動車も汚染されている

車も汚染源になります。車のタイヤに付着した土や、換気装置から入り込んだ放射性の塵（死の灰）。それにエアクリナーが汚染源になります。走行中は必ず窓とベンチレーターをしっかりと閉めましょう。タイヤは良く洗いましょう。エアクリナーは頻繁に交換しましょう。特に、汚染の高い地域を通ることはできるだけ避けましょう。

放射能を家の中に持ち込まないために

外出するときは、長袖・長ズボン、必ず傘とレインコートを持ち歩きます。上着はできるだけホコリを吸わない服にします。天然繊維のものより、ナイロンやビニールコーティングされたものがいいでしょう。帰ってきたら、注意深く体中のチリやホコリを落としてから家に入ります。

次に、家中の換気孔にフィルターを取り付けます。フィルターは放射能を帯びてしまいますので、定期的に洗浄、交換を行います。それから、下駄箱と傘立ては玄関の外に置きます。雨に濡れたレインコートも家の外に置いたほうがいいでしょう。

玄関の外（中じゃなくて外ですよ）に靴の土や泥を落とすマットを置いて、よく土や泥を落とします。靴やマットは、雨が染み込まない材質のものを使うほうが安全です。家の中はいつもこまめに掃除して、ちりがたまらないようにします。掃除機のフィルターも、自動車のエアクリナー同様、強い放射能を帯びる可能性がありますので、頻繁に交換や洗浄を行きましょう。

ふとんや洗濯物を外に干してはいけません。布団乾燥機を使うしかありません。洗濯物は家の中に干します。靴やレインコートはもちろんです。下駄箱や傘立ても頻繁に洗って放射能をできるだけ家から遠ざけるようにします。

事故後の子供たちの暮らし方

子供はおとなの10倍も放射能に敏感です。つまり、10倍の被害を受けるわけです。放射能は、事故炉周辺では大気中に充満します。離れたところは、事故直後は放射能雲となって襲い、その後、雨と共に降ってきて、土と水を汚染します。

長期的には地面に定着した放射能が問題になります。特に、子供達は背が低く、放射能におかされやすい内臓が地面に近いのです。放射能の影響は、距離の2乗に比例しますから、背が半分なら、4倍放射能の影響を受けることになります。

ですから、子供達を放射能から守るには、食べ物に注意すると同時に、地面や遊び場の汚染を最小限に食い止める必要があります。また、洗濯物も外に干せません。水も汚染される危険性があります。残念ですが、乳児のオムツは紙オムツを使うほうが安全でしょう。事故以前に製造されたものを最低2ヶ月分確保する必要があります。

小さな子供が好んで遊ぶのは砂場や公園です。また、保育園や幼稚園、学校も汚染から守らなければなりません。公園や学校の管理者に、直ちに公園や保育園、幼稚園、学校の全域をシートでおおい、建物は完全に目張りをするように求めましょう。地面だけでなく、ベンキを塗ってない、木製のベンチや、木製の遊具など、少しでも雨が染み込む可能性のあるものは、すべて完全にシートで覆っておかなくてはなりません。

放射能レベルが十分に下がるまでは子供を外に出してはいけません。2ヶ月くらいかかるかも知れません。その間は、学校や公園にも行かせないようにし、家の中で遊ばせるしかありません。学校などには、当分の間休校にするように働きかけましょう。

十分に放射能レベルが下がったら、覆いはずして、表に出ていたものは十分に洗淨します。それから放射能を測定し、安全を確認してから子供を外に出すようにしましょう。はずした覆いは、子供が近づかない場所に一か所にまとめ、「危険放射能」の表示をしておき、役所に引き取ってもらいます。

万一、放射能が検出された場合は、表土を3、4センチ削って、その土は子供の近づかないところにまとめて、シートで覆っておきます。「危険放射能」の表示を忘れずに。

からだから放射能を遠ざけるために

乳幼児、妊娠中の女性は、放射能に特に敏感です。食べ物、水、空気、雨、大地に気を付ける必要があります。

まず、できるだけ外出を控えます。特に雨の日は、絶対に出かけないようにしましょう。外出する場合はできるだけ肌を表に出さないようにします。雨には絶対に濡れないように。地面の上に座るのもたいへん危険です。地表に近いほど放射能が強いからです。

外出した後は必ずシャワーを浴びましょう。風呂は、段々汚染が強くなるので必ず子供から先に入れます。できればシャワーのみにしたほうがいいでしょう。体を洗うときは、あまり放射能を気にしてゴシゴシこすると、皮膚の抵抗力が低下するので、安全な石鹸を使ってやさしく洗いましょう。

髪の毛や体の毛は、チリ（もちろん放射製のチリも）を吸いやすいので、髪を良く洗いましょう。ショートカットにしたり、外出するときは帽子をかぶるほうが安全です。

放射能に汚染されてしまった大地・農作物をどうするか

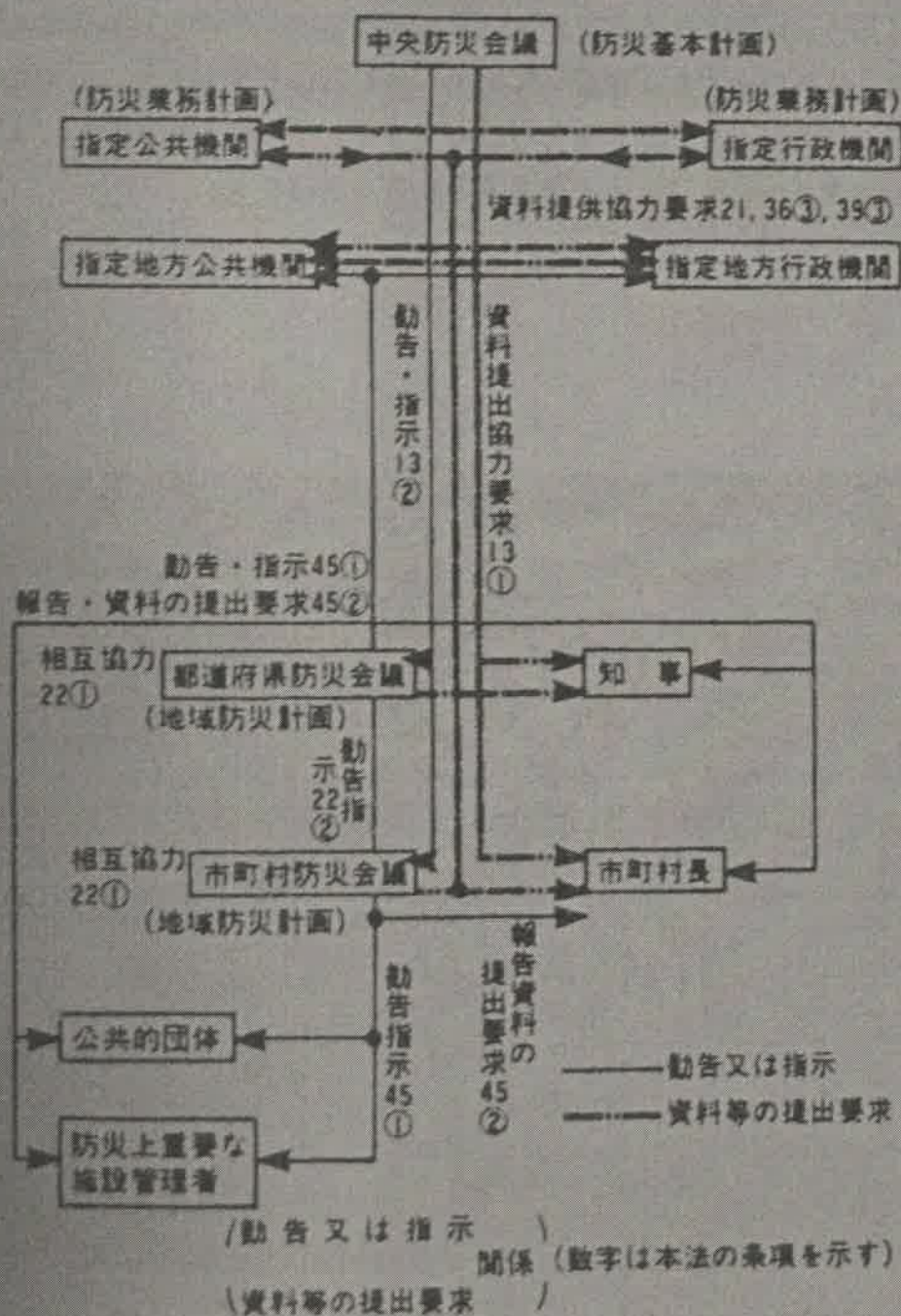
空気中の放射能や降雨による汚染の可能性が低くなった段階で地上に出ている部分はすべて刈り取ります。牧草などは、その後生えて来たものを家畜に食べさせるしかないでしょう（本当は土壌の状態を確認してからの方がよい）。間違っても大地にすき込んではいけません。

チェルノブイリのときにヨーロッパ各国の政府が取った対策を見ていると、汚染された作物のうち、保存できないものは土にすき込んでしまったり、燃やしたりしてしまい、保存できるものは、倉庫にしまっておいて、何年か経ってからこっそり売ってしまったり、汚染されていないものに混ぜさせたりしている場合があります。決してこんなことが起きないように監視をする必要があります。

汚染された作物は、人が近づいたり耕作される可能性のない場所に集めて、監視を続けなければなりません。燃やしてしまうと、放射性のチリを大気中に放出してしまいます。また、間違っても海洋投棄されたり、堆肥にされて、農地に戻されてしまうことがないように注意深く監視する必要があります。

汚染された土も、表土を何センチか削り取り、汚染された作物と同様一か所に集めます。養殖地は、「危険放射能」の表示をはっきりとし、子供が近づかないようにしなければなりません。回りに土をめぐらし、雨によって、放射能が地下水に流れ込まないように、表面を防水処理しなくてはなりません。地下水の汚染や環境へ放射能が漏れだすことを少しでも防止するため、継続的な監視が必要です。監視期間は汚染レベルにもよりますが、当面はセシウムが一桁下がる100年くらい監視をつづけて、その段階で後のことを考えるしかありません。

防災組織体制



やっとそれらしいものが出て、ほっと一息というのが正直な感想です。チェルノブイリ3周年に間に合わせた「超々暫定版」は、一応の反響をいただきましたが、ほとんど一晩で編纂したため、かなりいいかげんなできで、内心なにを言われるか不安でした。それに、コピーで作ったため、あまり沢山の手に取ってもらうことができませんでした。今回も毒蛇企図の小島氏の協力がなければ、完成は年末ぐらいになっていたでしょう。

それにしても、このハンドブックが役に立つ日が来てしまっただけは何にもなりません。読んでいただければわかると思いますが、いざ「その日」が来てしまえば、どんなに手を打っても、被害が拡大するのを遅らせる以上のことは出来ないのです。なにより、原子力発電所の恐ろしさを、多くの人に認識してもらい、一刻も早く原発を止めることが出来るように祈っています。

1989. 8. 2

合原亮一



日本の原子力発電所



■放射能汚染「危険」マーク

汚染された廃棄物に必ず貼りましょう。

